

# 【ねがいましては】

第31号

共和珠算塾 新浜  
平成3年1月26日

「あるんだねー」

ボクがまだ、中学生の頃のことなんだけれども、金のない家に生まれて、おまけに転校ばっかしさ。その頃もそうだった。移ったばかりの中学で、いつもいじめられてばっかしさ。その頃のボクには友達なんかひとりもなかった。心から笑った日なんか一日もなかったんだよ。毎日タタが、ただゆううつで、うつむくように生きていたんだね。

そんなボクが、どうしても高校に入りたくなくて、オヤジに相談してみたんだが、金がないからダメだと言うんだ。でも、受けるだけは受けてみろと言われて、受験だけはすませたが、自信なんかなんにもなかった。その日から何日たったかよく覚えていない。ボクはいつものようにアルバイトさ。重い重い自転車のペダルをこいで、ひとりぼっちのアルバイトだった。右手は瀬戸の海、夕暮れ時だった。ほこりっぽいジャリ道を、ひとりでポツーンとペダルをこいでいると、呪いたくなるほど、みじめな気持ちになるんだよ。なんてみすばらしい青春だろう。なんて悲しい青春だろうって。よたよた自転車をこいでいると、さげすむようにボクのことを見ているやつらがいる。ボクのクラスの秀才どもさ。きりっとしまった学生服を着て、真っ白い運動靴をはいて、自転車の前につたってってるんだ。なんだか急に腹が立って、ボクは自転車から飛びおりたんだよ。

なんでこいつらだけがぶらぶらして、なんでこいつらだけが、こんなかついい学生服を着て、なんで私だけが、こんな自転車をこいで、なんでこんなきたない学生服を着てなければならぬんだらうって。みじめな気持ちで胸がふさがって、涙がポロポロ、ポロポロ、こぼれたんだ。わけなんかわからない。ただ、ただ、そいつらをなぐってやりたかったんだよ。力もないしケンカなどもしたことのない私だけれども、そいつらだけがどうしても、力まかせになくてやりたかったんだ。

そしたら、そいつらのひとりが私に言ったんだ。「オイッ、おまえ、通つとったぞ。オイ山田、おまえは、おまえだけは、あの高校に合格しとったぞ。」なんだか、とんでもないこと、そいつらが言いだしたんだ。そうさ、きょうは受けた高校の合格の発表があった日なんだ。そうなんだ、そんなだいじなことすら忘れていたんだねー、私は。

アルバイトに追われて、突然のことで「そうか」って、くちびるをかみしめて、ケンカはやらすにつたつた。そいつら、みんな肩おとして去っていった。合格しても高校には行けないかも。いやー行けないだろう。たぶん行けないだろう。そんなことが頭の中をぐるぐるまわっていた。ふりかえって自転車のところへもどる。また飛び乗ってペダルをこぎ出す。ひとふみふたふみ、みふみ、よふみ、どうしたんだろうねー。さっきまであんなに重たかった自転車のペダルが急に軽くなったんだよ。こいでもこいでも、それから疲れないうんだよ。行けるかどうかかわからないが、でも合格したんだ。こんな自分が。

その日も、いつものように夕日が海へ落ちていくんだが、なんだか自分が、その夕日に向かってこいでいるようで。潮風に向かってペダルをこいでいるようで。

涙がね、さっきとぜんぜんちがう涙がこぼれてきたんだよ。

どんなにつまらない一生にだって、どんなにむくわれない一生にだって。

人間にはあるんだね。「生きていてよかった。悪いことばかりじゃないぞ。」そう心から叫びたくなる瞬間がね。

たしかに希望に向かって歩いている自分の姿が、見える時が。どんなにつまらない一生にだって、どんなにむくわれない一生にだって、あるんだね。ペダルがふっと軽くなるときが。生きている内には必ずあるんだねー。

以上は、武田鉄矢さんが「海援隊」の解散コンサートより、映画監督の山田洋次さんのことを語ったものです。山田監督のそんな経験が、寅さんや、しあわせの黄色いハンカチを生み出したのでしょう。

2月の予定

- |        |                     |
|--------|---------------------|
| 2日(土)  | 10級～4級検定            |
| 3日(日)  | 3級以上検定 詳しいことは前日教えます |
| 11日(祝) | チビッコそろばんまつり・・・湯島天神  |
| 12日(火) | 検定試験合格発表            |